Interview

【海外取材】独占インタヴュー

チェチーリア・バルトリ、モーツァルトを語る

モーツァルトがオペラの中で描く女性たちは、それぞれ異なった、特徴的な性格をもっています。それは音楽にも現れていて、彼女たちの性格、社会性、階級をも表しています。そこがモーツァルトの天才であるゆえんでしょう。

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka
Photo= Claudia M. Bischofberger

これまでに名だたる指揮者たちと共演を重ね、いま世界中からラヴ・コールが絶えることのない歌手のひとり、チェチーリア・バルトリが、「モーツァルト・イヤー」の2006年、プラハほかでモーツァルトに取り組む。3月には十数年ぶりとなる来日公演も控えている氏にモーツァルトの魅力などについて話を聞いた。

待ちに待ったその日、チューリヒは初雪に見舞われた。2005年4月に彼女がチューリヒ歌劇場で《ジュリオ・チェーザレ》を歌った時から、私たちはインタヴューの実現に向けて、着々と計画を進めていたのだった。みぞれに変わった雪もやんだ頃、湖沿いの5つ星ホテル、エデン・オ・ラックに、10分の遅刻を詫びながら現れたバルトリは、びっくりするほど自然体だったが、さすがに彼女の存在観は圧倒的で、その場はパッと華やいだ雰囲気になった。舞台上で聴衆を惹き付ける、あの笑顔、愛嬌、気配り、親近感を直に見て感じることができた。

バレンボイムとアーノンクールが、私とモーツァルトの関係を決定的にしてくれました

――これまでに取り組んだモーツァルトのオペラについてお話いただけますか。

バルトリ（以下、B） 私をモーツァルトの世界へと導いてくれたのはバレンボイムでした。彼と出会ったのは、

私がまだ若い頃、20歳か21歳の時だったと思います。彼は私に「モーツァルトを勉強するように」とアドヴァイスしてくれたのです。そして、モーツァルトのコンサート・アリアで、一緒にいくつものリサイタルを開きました。こうして長い期間、ダニエルとモーツァルトの勉強を重ねた後、《フィガロの結婚》のケルビーノを彼の指揮で歌い、実質的なオペラ・デビューを果たしたのです。もちろん、私にとっての初めてのオペラは、8歳の時に歌った《トスカ》の牧童役ですが（笑）。彼とは《コジ・ファン・トゥッテ》のドラベッラも歌いました。

バレンボイムは、私にとって初めての偉大な指揮者で、とても若かった私に最高のアドヴァイスをしてくれたと思っています。彼とはその後も、録音やリサイタルで共演していますし、2006年はベルリンとプラハでもリサイタルをします。

バレンボイムとのオペラ・デビューから1、2年経った頃でしょうか、その評判を聞いてか、アーノンクールがオーディションをして下さり、「チューリヒ歌劇場でケルビーノを歌えるか」と尋ねられたのです。その後、彼の指揮で《ドン・ジョヴァンニ》のツェルリーナを歌ったことも印象に残っています。ウィーンでは《ルーチョ・シッラ》のチェチーリオも歌いました。彼もまた、私をモーツァルトの世界に引き込んでくれた最初の指揮者の1人でした。バレンボイムとアーノンクールが、私とモーツァルトとの関係を決定的にしてくれたと言っても過言ではないでしょう。その導きに、私はとても満足し、感謝しています。

こんな風に、私のモーツァルトのオペラにおけるキャリアは、初めは、若く、女性に求愛する役柄から始まりました。ケルビーノなど、ほとんど彼と同い年の私が演じるという幸運に恵まれ、その後、ドラベッラ、ツェルリーナを経て、時と共に、同じオペラの別の役を演じるようになっていったのです。それは、なんとなく、自分自身の成長過程に似ているようにも感じます。

例えば、1995年にメトロポリタン歌劇場にデビューしたのも《コジ・ファン・トゥッテ》で、その時はデスピーナに挑戦しています。ドラベッラとは違う観点からこのオペラを経験したのです。その後、アーノンクールとはチューリヒ歌劇場で、ラトルとは昨年ザルツブルグ音楽祭でフィオルディリージも歌いましたので、このオペラの女性の役は全員歌ったことになります。それ以外には、《皇帝ティトの慈悲》のセストなども歌い、数年前にウィーンでDVDにも録音されたショルティとの《レクイエム》やミサ曲、コンサート・アリアなども多く歌っています。

――それらの役の難しさ、魅力についてはどうお考えですか？

B モーツァルトの描く女性たちは、それぞれ異なった、特徴的な性格をもっています。その性格は、音楽のラインにも現れ、その人物特有のラインが与えられているのです。そのラインが、彼女たちの性格のみならず、社会性、属する階級までをも表しています。

例えば、デスピーナの音楽の中には、民衆、ある意味で庶民の世界が感じられます。同じモーツァルトという人物が、デスピーナにはこのようなメソードで音楽を作り、ドラベッラ、フィオルディリージに対しても、別々の手法で音楽を与えているのです。そこがモーツァルトの天才であるゆえんでしょう。それらを読み取り、それぞれの性格を浮き彫りにしながら歌うのが、難しさでもあり、魅力でもあります。歌うたびに役への解釈が深まっていきます。それは、そのオペラを、もっと言えばモーツァルトの音楽をよりよく理解していくための道筋なのです。

すべてを克服できた時、モーツァルト特有の神懸かりな美しさが出てくるのです

――一番好きな役はなんですか？

B 《コジ・ファン・トゥッテ》にしても、3人3様の性格の差を表現するのが楽しいので、特に1つの役に傾倒していることはありません。《ドン・ジョヴァンニ》においても、ツェルリーナで歌い始めましたが、ドンナ・エルヴィーラも歌っています。毎回、新しい役を演じるごとに、そのオペラを新しい次元から再発見できるのが、モーツァルトのオペラの素晴らしさです。こうして私は、モーツァルトのオペラに対して3次元的な経験を積むことができていると言えるでしょう。3役とも歌うことによって、それぞれがとても魅力的だということが分かってしまい、その中の1つだけを選ぶことを難しくするのです。

――それでも、1つだけ選ばれるとすれば？

B 強いて言えば、フィオルディリージです。彼女はとても優しく、矛盾するところもたくさんあり、心の中の葛藤にあふれている役ですが、デスピーナも、とても興味深く、エネルギッシュで、まさにフィオルディリージに欠けているユーモアにあふれる性格をしているので捨て難いのです。例えばデスピーナはフィオルディリージにはなれませんが、フィオルディリージの世界の一部ではあるのです。反対に、フィオルディリージはデスピーナの世界の中に存在することすらできません。そういう細かい点も考え抜き、それらの役に最適な音楽表現、最

適な声の色を与え、歌い演じることができるところが魅力的なのです。自分に一番合った、理想的なモーツァルトの役柄を選ぶのは難しく、モーツァルトの世界自体が奥深く、素晴らしいと言わざるを得ないのです。

――ほかの作曲家と比べて、モーツァルトのオペラを歌い演じる難しさはどんなところでしょうか？

B モーツァルトを語る時、同時にハイドンやサリエリについても考えなければなりません。それは、モーツァルトが生きた世界を考えることであり、彼が影響を受けたウィーンの音楽界、そしてイタリアの音楽界のことも考慮に入れる必要があるからです。彼はとても若いうちから何度もイタリアを旅行しているのですから、その異国文化に感銘を受けたことは確かでしょう。そして、そのような経験を経た彼の音楽のラインというのは、とても純粋で、モーツァルト特有のシンプルさがありますが、それは偽りのシンプルさ、つまり単純に見えてとても複雑、実現するのが難しいシンプルさなのです。彼の純粋な音楽ラインを再現すること、レガート、モーツァルト特有のフレーズを保ちながら演奏するということは、簡単なようで、実は高度な技術を要求しますから。ですから、歌い手にとって基本となる技術の習得、またその技術の向上にも適しています。

私の両親は2人とも歌手で、母はレナータ・スコットと共に、今もマスタークラスで教えています。娘だから言うわけではありませんが、70歳になった今も、とてもいいソプラノ・リリコの声を維持しています。確かな技術を得ることで、楽器をいたわり、長く歌うことができるようになるのです。私はそういう環境の中で育ち、歌うためには、まず基本的な技術が大切だということを身体で覚えました。技術なしに、どうして、音楽の中で自由に表現することができるでしょうか。私も、難しい点はコンサート前にすべて解決し、本番では多少の緊張はつきものでも、音楽の表現と音楽そのものを楽しむことに徹しています。モーツァルトの音楽にはそのような難しさがありますが、それを克服してふさわしい表現ができた時、彼の音楽特有の神懸かりな美しさが出てくるのだと思います。

1月からモーツァルトゆかりの街、プラハで歌います。

――モーツァルトの声楽アンサンブルについて、独特なものとは何だとお考えですか？

B モーツァルトのアンサンブルについて話す時にまず思い出すのは、《フィガロの結婚》の2幕のフィナーレです。アントニオの登場からフィガロが入って来てと、延々約45分から50分くらい続くのではないでしょうか、そのすべてのシーンが私にとって奇跡的なものです。オーケストラと声のラインが織り成す融和、対位法上の構成がとても興味深いのです。こういったアンサンブルの充実が、モーツァルトのオペラの質の高さを支えているということは、言うまでもないことでしょう。彼独自の単純に見えるフレーズと、見事に調和した複雑なアンサンブルが音楽的に対をなし、そこに彼の細やかな人物描写が相まって、万人をひき付けるモーツァルトのオペラができあがっているのだと思います。

――作品、逸話から想像するモーツァルトとはどんな人物だったと思いますか？

B 間違いなく興味深い人物だったと思います。彼の音楽だけでなく、人間としても魅力的だと思います。繊細な人だったという確信もあります。また、ユーモアのセンスも確かにありましたね。父親やいとこに宛てた手紙の中に、彼の才気煥発な性格がよく表れています。彼のプライヴェートな生活に関して、もっと言えば、愛に関しても、とても生き生きとしたフレーズがありますので、間違いなく、奇抜な人物だったことでしょう。

2006年1月からモーツァルトゆかりの街、プラハで歌います。私の充実した「モーツァルト・イヤー」の幕開けです。3月の来日公演のために用意しているプログラムの1つでもモーツァルトを歌いますので、楽しみにしていて下さい。

モーツァルトに関するインタヴューを終えて、ひとつ理解できたことがある。1992年頃だったか、スカラ座でバルトリ氏のリサイタルを聴いた時のことのことだ。当時、20代の半ばだった彼女は、声も姿もまだ初々しさがあり、声量もスカラ座をやっと満たすという感じだったが、すでにテクニックは卓越したものがあった。真っ赤なドレスで、アンコールにケルビーノを歌ったのだが、そんなドレス姿すら、彼女を若い小将に仕立て上げる邪魔にはならなかったのだ。その数分間、彼女はどこから見てもケルビーノだった。その、歌唱を通した演技力に感動した思い出があるが、それは、今回話してくれたような、モーツァルトが描く人物への深い洞察力の賜物だったのだと、あらためて納得した。

チェチーリア・バルトリ（Ms）
1966年ローマ生まれ。歌手だった両親から声楽のトレーニングを受け、85年にパリ・オペラ座で行われた「マリア・カラス記念コンサート」に出演、注目される。その後サンタ・チェチーリア音楽院で学び、87年オペラ・デビュー。カラヤン、バレンボイム、アーノンクールなどと共演、モーツァルトからロッシーニ、ヘンデル、ハイドン、ヴィヴァルディ、グルックなどのオペラと取り組み、ことごとく高い評価を受けてきた。2003年にリリースされた「サリエリ・アルバム」はとりわけ好評を博し、ベストセラーに。CD「バルトリ／禁じられたオペラ」も12月にリリースされたばかり（ともにユニバーサル・ミュージックより）。2006年3月には、チョン・ミョンフンをパートナーに、十数年ぶりとなる来日公演を行う。

[来日公演情報]
■チェチーリア・バルトリ&チョン・ミョンフン「デュオ・コンサート」
[公演日程]
3月21日（サントリーホール）〈問合せ〉IMXクラシック&アーツ03・3496・2550
3月24日（愛知県立芸術劇場）〈問合せ〉IMXクラシック&アーツ03・3496・2550
3月27日（東京オペラシティ）〈問合せ〉東京オペラシティ03・5353・9999
※曲目ほか詳細未定